Japanese Association of Educational Psychology

Japanese Journal of Educational Psychology, 1989, 37, 11—19 

# 児童の達成における原因帰属—感情反応について

丹 羽 洋 子*

# ATTRIBUTION-AFFECT PROCESSES IN ACHIEVEMENTRELATED CONTEXTS IN SCHOOL AGE CHILDREN

Yoko NIWA

Three studies were conducted to examine linkages between cognition and emotion. In the first investigation, subjects were asked to name ten affects that would be experienced when they succeeded or failed in an exam. A factor analysis of the affects revealed a prevalent affect factor, a self-esteem factor, and a specific attribution-dependent affect factor. Next, using these affects, the relation between two components of the attribution process (causal attribution and causal dimension) and affective reactions to success and failure were empirically tested. Study 2 was an experiment requiring subjects to imagine themselves in different achievement situations and to rate affective reactions to success or failure. In study 3, subject were asked to rate affective reactions to performance on an actual examination. Results indicated that causal attribution and causal dimension had both joint and independent effects on affective reactions. Implications for a theoretical model of the relation between attribution processes and affects were discussed.

Key words : causal attribution, causal dimension, affection, achievement, school age children.

感情への認知論的アプローチにおいては，心理学的に複雑な認知過程に含まれた，そのたびごとの結果として感情経験が考えられている。たとえば，Arnold (1960) は，刺激の認知によって，primary appraisal と，素朴な (primitive) 感情反応が喚起され，続いて secondary appraisal が生じることを指摘している。さらに，自己に関するより高度な心理学的メカニズムを含み，これによって感情を鮮明にしたり，感情経験を調整したり，その質を変えることができるとしている。

また，帰属理論の枠組み (Weiner, 1977・1979) においては，まず第1に，ある出来事の結果にたいする認知された成功・失敗 (primary appraisal) に基づいて，一般的な正または負の素朴な感情が生じるとして，これを「結果依存の感情 (outcome-dependent affect)」と名づけている。この様な感情が存在するらしい事は，いくつかの研究 (Kelly, 1983) で見いだされているが，実際にはどのような感情が，結果に依存した感情であるかは明らかにされておらず，これまで個々の研究で用いられた感情は，研究ごとに異なっていた。

帰属理論的アプローチでは，2つめに「帰属に伴う感情 (attribution-linked affect)」を仮定している。これは，もし結果が negative なものであったり，予想外であったり，重要なものであったならば，その結果の原因が追求され，選ばれた原因によってさまざまな感情が生じるとしている。この様な理論と一致した結果としては，McFarland & Ross (1982) などの研究があげられる。そこでは，11項目からなる気持ちについての形容詞尺度がつくられ因子分析された。その結果3因子 (negative 感情因子・positive 感情因子・self-esteem に関する感情因子) が抽出され，このうち self-esteem に関する感情は，帰属によって影響される感情と判断される。

ところが一方，この様な仮説状況ではなく，自我関与状況における感情について研究した結果では，Reimer (1975) の研究にみられるように，Weiner の主張する2

* 筑波大学心理学研究科 (Institute of Psychology, University of Tsukuba)



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



種類の感情は見いだされなかった。また，Ruble (1976) の研究においても，感情は単一の「うれしい (happy)」—「悲しい (sadness)」の次元のみで測定されることが示されている。Weiner (1979) は仮説状況での大学生に対する評定から，8つの帰属因について各々生じるとされる感情をあげている。しかし，果たして実際の達成状況で，この様な帰属によって生じる感情が存在するのかどうかは，未だ明らかにされていない。したがって，帰属ごとに生じる実際の感情についても疑問が残る。

さらに，帰属理論の立場では，3つめとして，感情過程には「原因の次元」が重要な役割を果たし，各々の原因の次元は独自に何らかの感情経験と関連するとし，たとえば locus の次元はプライドに関連する事を仮定している。原因の次元と感情反応の連鎖について，Smith & Kluegel (1982) は，日々の生活における内的帰属が，恥・失望・フラストレーションにつながることを示した。しかし，安定性とコントロール可能性の次元が，感情に関連することを見いだせなかった。McAuley, Russell, & Gross (1983) の研究では，運動の遂行において，コントロールの次元は locus の次元より情緒反応に影響していることが明らかにされた。この様に，原因の次元と感情反応については，一致した結果は得られていない。

以上のように，認知と感情の連鎖について，3つの側面から見てきたが，これらはいずれも大学生を対象として導き出された結果であり，子どもについて独自に達成における感情反応を見たものは少ない。わが国においても，達成の分脈で感情を扱う場合，Weiner の理論において見いだされた感情がそのまま使用されている。たとえば，自尊心と原因帰属の結び付きを小学2年生から大人まで検討した速水 (1984) の研究では，自尊感情として「自慢・自信」「恥・やる気を失う」の表現が採用されている。また，高校生について，Weiner の帰属モデルの検討を行った相川ら (1985) の研究では，結果依存の感情として「うれしい・楽しい・がっかり・悲しい」，帰属依存の感情として「ほこらしい・気持ちがよい・恥・みじめ」が用いられている。しかし，まず感情の表現の問題として，Weiner の結果をそのまま訳して日本語にあてはめることが適切かどうかが問題になってくる。さらに，子どもについて研究する場合，Weiner の言う程に感情が分化しているのかどうかが問題である。

そこで，本研究においては，まず最初に，子どもが達成によって生じる感情反応には，どのようなものがあるかを調査し，その種類を明白にすることを，第1の目的とする。次に，そこで見いだされた感情を用いて，これまで別々に検討されてきた原因帰属・原因の次元，並びに感情との関連を検討することを第2の目的とする。さらに，ここで見いだされた認知—感情の連鎖が，実際の達成場面においても見られるかどうかについて，検討することを，第3の目的とする。

## 研究 I

### 目的

児童が達成によって，生じる感情反応を自由記述によって集め，その種類を明らかにすることを目的とする。

そのために，Weiner の結果を中心に，問題点をさぐっていくと，まず第1に問題になるのは，「満足」の感情である。一方では，自尊感情に結びつくことが指摘されていながらまた別の論文 (Weiner, 1979) では，帰属と感情についての研究をレビューして，「成功の時の感情を測定するのに，過去の研究ではほとんど『どれくらい満足か』の質問が用いられている。しかし，この満足の感情は，全体的な情緒状態をあらわすものであるから，これを用いるのは，ふさわしくない」と述べている。

さらに，2つめの問題は「自信」であろう。Weiner の1978年の論文では，能力帰属と結びつくとしながらも，1979年の論文では，「うれしいと自信は，成功という結果によって生じる感情」と述べている。自信といえば，直感的には自尊感情と結びついているように思われるが，果たしていずれであるのであろうか。

3つめには「恥」が挙げられる。Weiner の1978年の論文では努力帰属と結びついていたが，1979年の論文では，恥の感情が消えている。最近，自己価値理論の立場から，Covington & Omelich (1984) は，全体的な恥 (shame) の感情は，能力帰属と関連した humiliation と，努力帰属と関連した guilt の2つの要素に分けられることを提示している。しかし子どもでも，恥の概念はこのように分化しているのかどうか検討されるべき点だと思われる。

### 予備調査

被験者　茨城県内の公立S小学校　5年生47名，6年生33名，合計80名（男子43名・女子37名）

手続　自由記述法による。「テストで続けて良い点（又は悪い点）ばかりとった時の気持ち」について，10個ずつ回答を求めた。

結果　描写された成功の感情（平均5.4個）と失敗の感情（平均4.3個）の内，感情とは考えられないもの（お母さんにたたかれるなという気持ち，おこずかいのへる感じ，等）を除いて，残った成功時の感情は13個，失敗時の感情は12個であり，TABLE 1・2に示した通りである。尚，＜　＞内は，児童によって記述されたすべての感情語中



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



TABLE 1　成功の感情についての因子分析

| 感情語〈出現率%〉/Factor | I | II | III | IV | $h^2$ |
|---|---|---|---|---|---|
| とくいな気持ち〈0.9〉 | .661 | | | | .497 |
| えらいんだなあという気持ち〈1.4〉 | .572 | | | | .433 |
| みんなにみせたい気持ち〈1.6〉 | .523 | | | | .292 |
| どうどうとできる〈1.6〉 | .497 | | | | .324 |
| ほんとかな？〈3.2〉 | | .690 | | | .483 |
| びっくりした〈1.9〉 | | .675 | | | .501 |
| てれくさい感じ〈0.9〉 | | .607 | | | .382 |
| ほっとした気持ち〈2.8〉 | | .316 | | | .221 |
| やればできるんだな〈2.8〉 | | | .640 | | .419 |
| 自信ができた感じ〈☆〉 | .320 | | .514 | | .418 |
| うれしい〈13.0〉 | | | .416 | | .253 |
| 今度もがんばろうという気持ち〈4.4〉 | | | .378 | | .168 |
| 自分に満足した気持ち〈☆〉 | | | .359 | .345 | .378 |
| よかった〈10.6〉 | | | | .734 | .566 |
| やった ー〈11.1〉 | | | | .534 | .418 |
| 〈計56.2%〉 因子負荷量の2乗和 | 1.608 | 1.593 | 1.418 | 1.135 | 5.754 |
| (寄与率　%) | (10.72) | (10.62) | (9.45) | (7.57) | (38.36) |

（注）因子負荷量は.30以上を記載した。尚，〈　〉内は記述された全感情語中に占めるそれぞれの感情語の出現の割合。☆印は，後から付け加えられた項目

TABLE 2　失敗の感情についての因子分析

| 感情語〈出現率%〉/Factor | I | II | III | IV | $h^2$ |
|---|---|---|---|---|---|
| みんなに知られたくない気持ち〈2.6〉 | .684 | | | .311 | .599 |
| 自分がみじめな気持ち〈☆〉 | .558 | | .456 | | .565 |
| しょんぼり〈2.0〉 | .503 | | | | .426 |
| くそーという感じ〈2.9〉 | .448 | | | | .320 |
| はずかしい気持ち〈12.2〉 | .375 | .340 | | | .307 |
| こまった〈1.7〉 | | .578 | | | .549 |
| しまった〈2.3〉 | | .515 | | | .406 |
| おこられるな〈8.7〉 | | .454 | | | .257 |
| がっかり〈3.5〉 | | .416 | | | .238 |
| どうしてかなという感じ〈5.2〉 | | .377 | | | .160 |
| だめな人間だという気持ち〈☆〉 | | | .724 | | .616 |
| 自分はばかだなあという気持ち〈0.9〉 | | | .585 | | .465 |
| かっこ悪いという気持ち〈2.0〉 | .342 | | .408 | | .366 |
| 自分に自信をなくしたという気持ち〈☆〉 | | | | .653 | .526 |
| やってもだめなんだという気持ち〈1.2〉 | | | | .466 | .244 |
| 〈計45.2%〉 因子負荷量の2乗和 | 1.863 | 1.637 | 1.514 | 1.030 | 6.044 |
| (寄与率　%) | (12.42) | (10.91) | (10.09) | (6.87) | (40.29) |

（注）因子負荷量は.30以上を記載した。尚，〈　〉内は記述された全感情語中に占めるそれぞれの感情語の出現の割合。☆印は，後から付け加えられた項目

に占めるそれぞれの感情語の出現の割合である。☆印のつけられたものは，次の手続の所に示した理由によって，後から実験者によって付け加えられたものである。

**方　法**

被験者　神奈川県下の公立I小学校　5年生111名，6年生120名，合計231名（男子127名，女子104名）

手続　自由記述では描写されなかったが，Weiner (1978) らの研究に基づいて，有能感もしくは無能感に関連していると考えられる感情が，それぞれ，成功時に2項目，失敗時に3項目つけ加えられた（TABLE 1・2の☆印をつけたもの）。これは，TABLE 1・2にあるように，全感情語の出現率が，児童の描写した感情の50%程度しかなく，その他は児童の気持ちを表わしてはいるが，感情ではない言葉で占められている事などから，小学5・6年生の感情の語彙数には限度があると思われたためである。さらに，反応の偏りを防ぐために，無関係の感情が3項目ずつ挿入された。従って，成功時・失敗時ともに18項目の感情について「テストで続けて良い点（又は悪い点）を取った時の感じ（気持ち）」がとてもそう思う（6点）～ぜんぜんそう思わない（1点）までの6段階で評定された。

以上のような質問紙が，各クラス単位で担任教師が1問ずつ読み上げることにより一斉に実施された。尚，得点化に際しては，挿入された無関係の項目は除かれた。

**結果と考察**

成功時・失敗時の感情反応への評定値のうち，「まぐれだ」と「しかたないなという気持ち」はともに分散が大きかったため，分析対象から除かれた。従って，各々の15項目ずつについて，因子分析が行われた。

成功時の感情　因子分析の結果，第4固有値と第5固有値の間にギャップが見られることから，4因子を抽出し，バリマックス回転を行った。回転後の因子分析結果は，TABLE 1の通りである。第1因子は，Weiner (1978) の分類の能力帰属と関連した感情又は，自慢・コンピテンスに対応しており「有能感」因子と命名できよう。第2因子は，運帰属を中心とした外的要因への帰属による感情と考えられ「外的帰属による感情」因子と命名できよう。第3因子は，やればできる・今度もがんばろう（activation）・自信・うれしい（安堵）・満足であり，「努力帰属による感情」因子と名づけられよう。第4因子は，帰属



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



と関係のない，成功した時の一般的な喜びの感情と解釈でき「一般的な正の感情」因子と命名できよう。以上の4因子は，まさにWeinerによって仮説された3種類の感情に一致するものであった。

そこで次に，「自信」の感情についてみてみると，本研究では，努力帰属によって生じる感情であることが明らかにされた。しかし，第1因子にも負荷量をもつ事から「自信」はある程度有能感につながる感情であると推測できよう。一方「満足」の感情に関しては，努力帰属に伴う感情であると同時に，成功という結果に伴う一般的感情（第4因子）であることがわかる。とすれば，先に述べたWeinerの批判（1979）は，実に的を得ているということができよう。「どのくらい満足か」によって，課題へのやる気の情緒反応を測定した場合には，この点を考慮に入れて考察する必要があろう。

失敗時の感情　同様にして，第4因子と第5因子の間にギャップが見られることから，4因子を抽出し，バリマックス回転を行った。回転後の因子分析の結果は，TABLE 2に示す通りである。第1因子には，知られたくない（guilt）・恥ずかしい（shame）・みじめ・しょんぼり（落胆）・くそー（不満足）など，自分自身の責任によって失敗を招いた時の感情と解釈でき「内的帰属による感情」因子とでも命名されよう。第2因子は，失敗という結果により生じる感情と理解され「一般的な負の感情」因子と命名された。第3因子は，だめな人間・ばかだな（無能感）・かっこ悪い（humiliation）と，無能感につながる感情と予想されるため「無能感」因子と命名された。第4因子は，失敗の原因が能力不足のせいである時の感情で「能力帰属による感情」因子と命名された。

以上の結果から，「恥」の概念が因子構造を複雑にしていることが示唆される。まず「恥ずかしい気持ち」は，最も一般的な恥の概念と考えられ，内的帰属による感情因子と一般的感情因子に負荷しており，自己価値理論における，shameに相当すると考えられる。「みんなに知られたくない気持ち」は，自分自身の中に幾分後悔の念の残る恥ずかしさであり，guiltにあてはまると思われる。「かっこ悪いという気持ち」は，自分の能力のなさを他人に対して恥じているわけであるから，humiliationと解釈できよう。この様に本研究の結果は，Covingtonらの恥の概念を支持するものであった。また，恥の概念はいずれも努力帰属と結びついており，能力がないという事態もさることながら，自分の努力不足により恥の感情が生じるものと理解されよう。注目されるのは，同じ「恥ずかしい」という感情であっても，大人が考える以上に，子どもの自由記述の中には多種類の恥が記述されていること，同時に因子分析においても同じ1つの恥としてまとまらず，すべて異なった意味をもち，異なった帰属によって生じる感情であることである。過去の研究では，失敗の時の感情として，恥が常に取り上げられてきたが，この中には子どもであっても，さまざまに意味が分化していることに留意する必要があると思われる。

## 研究 II

### 目的

研究Iで見いだされた児童の感情は，それぞれどのような認知過程（原因帰属・原因の次元）によって生じるのかを明らかにすることを目的とする。

本来原因の次元は，さまざまな原因帰属の認知に基づいて，それを同じ意味内容で分類することが可能であるという発想から生じた概念である（Weiner 1974）。もし，最終的に原因を次元によって認知すると考えるならば，原因帰属は次元と独立には，感情に対して重要なインパクトを持たないと予想される。ところでこれまで，原因帰属と感情，原因の次元と感情というように，別々に感情との関係が取り上げられてきたことを考慮するならば，これらは別々の独立した効果を持った2つの帰属過程として，感情反応に作用すると考えられる。

研究IIでは，果たしてどの様なプロセスによって，帰属—感情過程が機能しているかを検討する事を目的とする。

### 方法

被験者　茨城県下公立M小学校　5年生147名　6年生172名。合計317名（男女約同数）

この内，5年1組と2組・6年1組と2組を成功の感情群，5年3組と4組・6年3組と4組を失敗の感情群に割り当てた。

手続　①感情の測定　冊子は，6つの異なった原因をもつ達成場面についての例話から構成されていた。例えば，「運動会で朝から体の調子・気分が良くて（悪くて），1等（ビリ）になった」<気分>などの例話を用い，達成場面の原因が，能力・永続的努力・一時的努力・気分・課題の困難さ・運であるような6場面が選ばれた。達成の結果は，成功（成功の感情群用）と失敗（失敗の感情群用）の2種類が作られた。

また，6つの達成場面での感情評定に用いられた感情は，研究Iで見いだされた感情である。成功の感情（TABLE 1）のうち，2因子に負荷している自信と満足は包括的な感情と考えられるため，また，どうどうとできるについては，内部一貫性が低いため除外された。失敗の感情（TABLE 2）についても，内部一貫性の低いもの



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



（おこられるな・どうしてかなという感じ・やってもだめなんだという気持ち）は除かれた。従って，用いられた感情は成功・失敗共に12項目であり，各々の達成場面において，これらの感情をどの程度感じるか，6段階で評定された。

②原因の次元の測定　原因の次元スケールとしては，Russell（1982）のものが用いられた。これは被験者が，Weiner（1979）の locus・安定性・コントロール可能性の3次元から，達成の原因をどう認知しているかを測定するようにデザインされたものである。3次元それぞれ，3項目ずつ合計9項目からなり，回答形式はSD法によってなされている。この様な原因の次元スケールが，①で作成された6つの達成場面について評定された。

尚，以上のような調査の実施に際しては，各クラス単位の集団形式で，担任が1問ずつ問題を読み上げることにより一斉に回答していく形式がとられた。

**TABLE 3**　感情についての因子分析（成功の場合）

| 感情項目 | I | II | III | $h^2$ |
|---|---|---|---|---|
| うれしい | .843 | | | .833 |
| やったー | .797 | | | .772 |
| よかった | .757 | | | .750 |
| 今度もがんばろうという気持ち | .583 | | | .616 |
| やればできるんだなあ | .580 | | | .740 |
| ほっとした気持ち | .552 | .520 | | .192 |
| みんなに見せたい気持ち | | .798 | | .838 |
| とくいな気持ち | | .734 | | .600 |
| えらいんだなあという気持ち | | .724 | | .745 |
| びっくりした | | | .778 | .756 |
| ほんとかな？ | | | .767 | .802 |
| てれくさい感じ | | .590 | .552 | .701 |
| 因子負荷量の2乗和 | 3.691 | 2.784 | 2.305 | 8.780 |
| （寄与率　%） | (30.75) | (23.20) | (19.20) | (73.16) |

（注）因子負荷量は.400以上を記載した。

**TABLE 4**　感情についての因子分析（失敗の場合）

| 感情項目 | I | II | $h^2$ |
|---|---|---|---|
| がっかり | .862 | | .860 |
| しまった | .801 | | .721 |
| しょんぼり | .790 | | .763 |
| こまった | .763 | | .778 |
| くそーという感じ | .734 | | .632 |
| みじめな気持ち | .688 | .510 | .731 |
| だめな人間だという気持ち | | .869 | .843 |
| 自信をなくした | | .790 | .687 |
| 自分はばかだなあという気持ち | | .773 | .782 |
| かっこ悪いという気持ち | | .724 | .680 |
| はずかしい気持ち | .508 | .707 | .757 |
| みんなに知られたくない気持ち | .543 | .606 | .659 |
| 因子負荷量の2乗和 | 4.643 | 4.250 | 8.893 |
| （寄与率　%） | (38.69) | (35.42) | (74.11) |

（注）因子負荷量は.400以上を記載した。

**結果と考察**

①感情の因子分析

成功時の感情　感情12項目の評定値について因子分析を行い，3因子を抽出してバリマックス回転を行った。その結果，TABLE 3のように，第1因子は「一般的な正の感情」因子，第2因子は「有能感」因子，第3因子は予想外の成功から生まれる驚きや疑問を表わす「驚きの感情」因子と命名された。

失敗時の感情　成功時と同様に，因子分析を行い，2因子を抽出することによって，バリマックス回転を行った。その結果，TABLE 4に示されたように，第1因子は「一般的な負の感情」因子，第2因子は「無能感」因子と命名できよう。

以上の結果は，研究Iでの分析結果と若干異なり，努力帰属・外的帰属などの帰属ごとに生じる感情が見いだされていない。しかし第1～第3因子とも，寄与率も信頼性係数（.93～.84）も高く，安定した因子構造を持っていると言えよう。したがって，児童の感情反応は主に以上の3種類（成功時）と2種類（失敗時）に分化していると言ったほうが妥当であるように思われる。

②原因帰属と感情の関係

特定の原因帰属と感情反応の関係を明らかにするため，pair-wise tテストが用いられた。尚この際，2因子に負荷している成功の感情2項目と失敗の感情3項目は分析対象から除かれた。結果はTABLE 5に示された通りである。

成功時の感情　予想に反して，一般的な正の感情は，特定の原因の認知によって生じていた。すなわち，能力や努力などの内的要因に帰せられた時，あるいは，偶然の成功であっても「うれしい」感情は大きくなる。しかし，課題が容易で成功できた時には「うれしさ」は減少する。また有能感については，興味深いことに，能力・永続的努力帰属はコンピテンスの感情を高めるが，一時的努力は有能感とは無関係であることが明らかにされた。さらに驚きの感情は，ずっと努力し続けてきて，ある時予想外の成功をおさめた時生じ，外的要因による成功は，この様な驚きの感情を低めてしまうことがわかる。

失敗時の感情　成功時と同様，一般的な負の感情もやはり，Weiner の仮説に反して，原因帰属によって予測されるものであった。努力不足による失敗は「しょんぼり・がっかり」するが，能力不足への帰属は，気分・課題帰属と同様，一般的な負の感情を低めることがわかる。



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



TABLE 5 原因帰属と感情

| 原因帰属 | 成功の時 一般的正の感情 | 成功の時 有能感 | 成功の時 驚きの感情 | 失敗の時 一般的負の感情 | 失敗の時 無能感 |
|---|---|---|---|---|---|
| 能力 | 3.54* | 4.42* | 1.48 | −2.19* | 0.40 |
| 一時的努力 | 5.06* | −0.66 | −0.02 | 3.38* | 6.43* |
| 永続的努力 | 14.13* | 7.50* | 8.03* | 11.21* | 13.74* |
| 気分(体調) | 1.26* | 1.68 | 0.88 | −5.43* | −7.60* |
| 課題 | −13.21* | −9.72* | −8.75* | −5.59* | −11.89* |
| 運 | 19.23* | −14.58* | −5.57* | 2.29* | −3.48* |

(注) 表に示された値は，Pair-wise tテストによって求められたt値であり，各原因帰属についてのそれぞれの感情の値と，5つの他の原因帰属についての感情の値とを比較したものである。(成功の時 df=140，失敗の時 df=139) *p<.05

TABLE 6 成功時の感情に及ぼす原因の次元の効果

| 次元 | 一般的正の感情 βeta | 一般的正の感情 F | 有能感 βeta | 有能感 F | 驚きの感情 βeta | 驚きの感情 F |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 原因の所在 | 0.049 | 0.268 | 0.018 | 0.045 | −0.083 | 0.758 |
| 安定性 | −0.064 | 0.482 | 0.383 | 21.295** | −0.020 | 0.045 |
| 統制可能性 | 0.180 | 3.721** | 0.170 | 4.129** | −0.045 | 0.230 |

**p<.01

TABLE 7 失敗時の感情に及ぼす原因の次元の効果

| 次元 | 一般的負の感情 βeta | 一般的負の感情 F | 無能感 βeta | 無能感 F |
|---|---|---|---|---|
| 原因の所在 | 0.424 | 27.728** | 0.363 | 18.125** |
| 安定性 | −0.058 | 0.534 | 0.137 | 2.659** |
| 統制可能性 | 0.099 | 1.393 | −0.095 | 1.149 |

**p<.01

無能感についても，努力帰属によって強い無能感が生じ，気分・課題・運帰属によって無能感が弱められる。能力帰属と無能感の関係は見いだされなかった。

以上の事から，特定の原因を認知することによって，ある感情が生じてくるだけでなく，同時にそれは，他の特定の感情をおさえる働きをする事が明らかにされた。

③原因の次元と感情の関係

成功時の感情 次に原因の次元が，感情反応と関係しているかどうかを解明するため，重回帰分析がなされた。結果は TABLE 6 の通りである。「有能感」は，原因が自分で統制でき，次回もおなじ結果が得られると認知できたとき，より強くなると思われる。「一般的な正の感情」についても，自分でどうにかできると認知したとき最大となっている。「驚きの感情」は，原因の次元とは関係なく，その場面や状況によって生まれると考えられる。

失敗時の感情 TABLE 7 に示した様に「無能感」が最も強くなるのは，自分に原因があると考えられ，将来も同じ結果が予想される時である。「一般的な負の感情」についても同様に，その原因が，自分にあると認知された時最大になることが明らかにされた。

以上から，成功・失敗の感情を比較してみると，興味深い事に，成功時にはコントロールの次元が，失敗時には locus の次元が関係している。感情に関する形容詞を因子分析した結果，正の感情と負の感情が見いだされた (McFarland, 1982) ことからみても，正の感情の裏返しが負の感情なのではなく，成功時と失敗時では異なった認知的メカニズムで感情反応の生じる事が示唆された。

また，Weiner (1979) では特定の原因の次元と結びついた感情として，locus の次元に関するプライドの感情を挙げている。しかし本研究では，有能感 (コントロール可能性)，無能感 (locus) それぞれ特定の次元と結びついていると同時に，これらは共に安定性の次元とも結びついている事が明らかにされた。自分は優秀 (無能) だという自信を得る (自信を失う) ためには，1度きりの成功 (失敗) でなく，将来においても同じ結果が予想される事が必要であるためと推測される。

以上の結果から原因帰属と原因の次元と感情反応の関係について考えてみると，一般的な正・負の感情や，有能感・無能感は，原因帰属によって高められたり，低められたりすると同時に，それぞれ特定の次元の認知によっても生じると理解される。一方驚きの感情の様に，何らかの原因を認知する事によって生じるが，次元とは無関係の感情も存在する。故に，原因帰属によってのみ直接導かれる認知過程と，原因の次元によって導かれる認知過程 (原因帰属からの媒介の役目を果たすものも含む) とが同時に存在し，いかなる感情を経験するかが決定されるものと考えられよう。

## 研究 III

### 目的

研究IIでは，原因帰属と成功・失敗の結果が実験的に操作されたが，この方法では，たとえ実際の感情がそうでなくとも「特定の原因帰属と感情の関連性についての被験者の理論を反映したもの」(McFarland, 1982) となるかもしれない。そこで，被験児に実際に自我関与の高い結果を経験させる事が必要と思われる。さらにまた，研究IIと同様の方法で，現実の達成における感情を測定することによって，研究IIの結果が，実際の複雑な認知—感情過程にどのように位置づけられているのかを比較検



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



討することが可能になると思われる。

そこで，本研究においては，学校場面における達成（テスト）をとりあげ，各自がそこで得た結果に基づいた認知と感情反応について検討することを目的とする。

**方　法**

被験者　茨城県下の公立N小学校　5年生　141名。（男子83名，女子58名）

手続　①テスト結果の評定—算数のテスト返却直後，その結果について成功または失敗の各自の判断が求められた。②原因帰属の測定—成功または失敗の理由について自由記述が求められた。③感情評定—自分のテスト結果を見てどう感じるかが，研究Ⅱで用いたのと同様の感情項目（自分で成功だったと思う者は成功の感情，失敗と思う者は失敗の感情）を用いて評定された。④原因の次元の測定—自分のテスト結果について，研究Ⅱで用いられたのと同様の原因の次元尺度を用いて測定された。

**結果と考察**

テスト結果についての各自の判断に基づいて，成功群・失敗群に分類され，以下の分析はこれらの群別に行われた。また，自由記述された原因帰属は，2人の評定者によって7つの帰属因に分類された。評定者間の一致率は88%であり，不一致の記述は2人で討論の末，いずれかの帰属因にコーディングされた（TABLE 8参照）。その

**TABLE 8**　成功した者・失敗した者それぞれによってなされた原因帰属の割合

| 原因帰属因（%） | 成功群 | 失敗群 |
|---|---|---|
| 能　　力 | 30.5(6.9) | 33.3(10.2) |
| 一時的努力 | 45.8 | 43.5 |
| 永続的努力 | 6.9 | 1.4 |
| 気分（体調） | 0 | 0 |
| 課　　題 | 8.3 | 2.9 |
| 運 | 2.8 | 1.4 |
| 性　　格 | 0 | 5.8 |
| そ の 他 | 5.6 | 11.6 |

内，能力帰属については，過去の研究結果と同様に，純粋に「算数は得意だから」「頭が悪いから」の理由をあげる者は（　）内に示された様に，僅かであった。しかし，児童における能力概念の発達についての研究結果（丹羽，1988）では，5年生は「結果＝能力」つまり，よい点のほうがかしこい（=level 2でこれ以下に属するもの31%），「努力量と結果は等しく，多い努力またはよい結果＝能力」と認知する者（=level 3で23%）であることが見いだされている。従って，この年齢では半数の子どもが「かしこい」＝良い点をとる事（「結果」による判断）と認知している事が示唆されたため，20%強をしめていた「80点もとれたから」「全然できなかったから」などもここでは能力帰属として分類された。気分と性格への帰属はまれにしか用いられなかった為，この2つとその他を除いて，残った5帰属因が以下の分析で用いられた。

①原因帰属と感情

研究Ⅱと同様に分析された結果，成功の感情については，能力帰属と努力帰属いずれの場合も，3種類の感情（一般的な正の感情・有能感・驚きの感情）と有意に関係していた（$p<.05$）。その他，$p<.05$で有意になったもののみを取り上げると，課題が容易で成功できた時には，驚きの感情は最小になると考えられる。まぐれ（運）で成功できた時でも，うれしいの一般的な正の感情が生じ，またこのように認知する程，有能感は低くなる傾向のあることが示された。これらの結果は，TABLE 5で示された研究Ⅱの結果と一致していることがわかる。

失敗の感情は，課題・運帰属した児童が少なかったため分析されなかった。能力・努力帰属については，一般的な負の感情・無能感の生じることが明らかにされた。

②原因の次元と感情

研究Ⅱと同様に分析した結果「一般的な正の感情」「驚きの感情」「無能感」と，原因の次元との間に有意な関

**TABLE 9**　「有能感」と「一般的な負の感情」に及ぼす原因の次元の効果

| 次　元 | 有能感 βeta | 有能感 F | 一般的な負の感情 βeta | 一般的な負の感情 F |
|---|---|---|---|---|
| 原因の所在 | 0.139 | 2.572* | 0.150 | 2.871* |
| 安 定 性 | 0.166 | 3.825** | −0.0367 | 0.172 |
| 統制可能性 | 0.067 | 0.602 | 0.045 | 0.264 |

*$p<.05$　**$p<.01$

連は見られなかった。TABLE 9にある通り「有能感」は，成功の原因が自分にあり，次回も同じ成功が修められると認知した時より強まり「一般的な負の感情」も自分のせいで失敗したと認知した時生じることが見いだされた。

成功時はコントロールの次元と，失敗時はlocusの次元と関連するという研究Ⅱの結果と比較して，ここではいずれも，locusの次元によって予測されていた。この相違は，方法論上の違いが考えられる。架空場面での成功は，自分が得た結果ではないため，そこでの成功が自分でコントロールできそうかどうかの判断が影響してくる。一方現実の達成場面は，自分でコントロールを経験した結果であるから，locusの方がより有能感を予測すると考えられよう。しかしこれらは，あくまでも推論にすぎない。最近，統制可能性の次元は，援助行動や達成



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



行動の研究で取り上げられているが，この様な研究II・IIIの次元の相違については，用いられた課題が架空場面の課題か実際の自己の達成か，課題が自己のコントロールをどれほど予測できるものであるかなどの違いに注目してさらに検討，解明されなければならない点であると思われる。

以上の結果から，原因帰属と原因の次元と感情の関係について，見いだされた関連は少ないが，傾向は研究IIとやや類似したものであるといえよう。従って，現実場面では研究IIほど，これらの結びつきが明確でないにしろ，ほぼ同様の帰属—感情過程を経ていると推測できよう。

## 全体的考察

本研究は，思考と感情の一般的法則を解明していく第一歩として，感情と帰属の関係が検討された。結果，いくつか問題点が残されたが，その1つとして「一般的な正と負の感情」は，Weiner の理論と異なり，特定の原因帰属や原因の次元によって影響されていた。本研究と同様な結果を得たものとして，Russell & Mehrabian (1977) の研究があげられる。そこでは「うれしい」の感情は，能力・努力・運帰属と結びついていた。本研究や上述の研究が，Weiner の研究と異なった理由としては，時間的順序性が考慮されなかった事が考えられる。感情への認知的アプローチにおいては，primary appraisal に続いて，正または負の primitive affect が生じると仮定し，Weiner はこれを結果依存の感情とした。しかし本研究で評定された「うれしい・しょんぼり」などの感情は，その後の secondary appraisal を測定したものと考えられる。研究IIでは，特定の帰属状況が先に設定されており，研究IIIでも，テスト返却直後といっても児童は達成結果についてさまざまな思考を行ったであろうし，測定方法から判断すれば，当然原因帰属によって媒介されると考える方が妥当であろう。今後これらの帰属に影響されない primitive affect をいかにとらえるかが課題となろう。

また全体的に研究IIとIIIを比較すると，実際の達成では帰属と感情の結びつきは弱いとはいえ，研究IIの結果と類似した傾向を示した。過去の研究ではRussell (1977) は大学生の中間テストについて研究したが，原因帰属と原因の次元いずれも感情反応との関連はほとんどみい出せなかった。しかし，本研究においても実際場面での感情が，研究IIで得られた結果ほどは明確でない理由として，次の様な事が考えられよう。まず研究IIでは，帰属—感情の一過程のみが取り扱われたが，研究IIの実際場面では，認知—感情の連鎖が同時的にくり返し行われていると推測される。すなわち「さまざまの帰属により感情が生じるというよりさまざまのレベルの感情が異なった帰属を生じている」(Weiner 1978) ためと考えられよう。さらに「感情反応の強さと方向は課題の価値に従う」(Covington & Omelich 1984) とするならば，研究IIではさまざまの価値の課題が使用されたが，研究IIIではテストという一定の課題を用いたため，結果に偏りがみられたとも推測できよう。

さらに，本研究で取り扱ったのは，達成の際，認知によって生じる感情のみについてであった。しかし，実際には，感情状態が認知過程に影響するとも考えられる。たとえば，気分的に落ち込んでいる時や，常に抑うつの気分の人は，出来事を否定的に認知し，negative な感情が生じるであろう。従って，動機づけにおける感情の役割を重視するならば，この様なより長期的な感情についても，今後注目していく必要があると思われる。

## 引用文献

相川充・三島勝正・松本卓三 1985 原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響—Weiner の達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討— 教育心理学研究，**33**，195—204.

Arnold, M. B. 1960 Perennial problems in the field of emotion. In Arnold, M. B. (Ed.) Feelings and emotions (pp. 169—203). New York : Academic Press.

Covington, M. V. & Omelich, C. L. 1984 An empirical examination of Weiner's critique of attribution research. *Journal of educational Psychology*. **76**, 1214—1225.

速水敏彦 1984 学業成績についての原因帰属の推測過程の発達 教育心理学研究，**32**，10—19.

Klly, H.H. 1983 The situational origins of human tendencies : A further reason for the formal analysis of structures. *Personality and Social psychology Bulletin*. **9**, 8—30.

McAuley, E., Russell, D. & Gross, J. 1983 Affective consequences of winning and losing : An attributional analysis. *Journal of Sport Psychology*. **5**, 278—287.

McMillan, J.H. & Forsyth, D.R. 1983 Attribution-affect relationships following classroom performance. *Contemporary Educational Psychology*. **8**, 109—118.

McFarland, C. & Ross, M. 1982 The impact of



NII-Electronic Library Service

Japanese Association of Educational Psychology



causal attributions on affective reactions to success and failure. *Journal of Personality and Social Psychology*. **43**, 937—946.

丹羽洋子 1988 児童・生徒における能力概念の発達 未発表論文

Reimer, B.S. 1975 Influence of causal belief on affect and expectancy. *Journal of Personality and Social Psychology*. 31, 1163—1167.

Ruble, D. N., Parsons, J.E. & Ross, J. 1976 Self-evaluative responses of children in an achievement setting. *Child Development*. **47**, 990—997.

Russell, J.A. & Mehrabian, A. 1977 Evidence for a three-factor theory of emotions. *Journal of Research in Personality*. **11**, 273—294.

Russell, D. 1982 The causal dimension scale : A measure of how individuals perceive causes. *Journal of Personality and Social Psychology*. **42**, 1137—1145.

Smith, E.R. & Kluegel, J.R. 1982 Cognitive and social bases of emotional experience : outcome, attribution, and affect. *Journal of Personality and Social Psychology*. **43**, 1129—1141.

Weiner, B. (Eds.) 1974 Achievement motivation and attribution theory. Morristown, NJ : General Learning Press.

Weiner, B. 1977 Attribution and affect : comments on Sohn's critique. *Journal of Educational Psychology*. **69**, 506—511.

Weiner, B., Russell, D. & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In J.H. Harvey, W.J. Ickes, & R.F. Kidd (Eds.), New directions in attribution research(Vol. 2, pp. 59—90). Hillsdale, NJ : Erlbaum.

Weiner, B., Russell, D. & Lerman, D. 1979 The cognition-emotion process in achievement related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*. **37**, 1211—1221.

## 謝　辞

本研究の実施にあたり，ご協力くださった小学校の先生方及び，児童の皆様に心から感謝いたします。また本論文の作成にあたり，ご指導いただきました筑波大学心理学系の高野清純教授，杉原一昭教授に深く感謝致します。

（1988年２月10日受稿）



NII-Electronic Library Service